

NEWSLETTER

ISSN 2186-9812

五名のため池—讃岐探訪 2022年8月27日—

香川大学 村山 聡

2022年8月27日土曜日の午後、愛知県立大学の歴史地理学者である服部亜由未氏を高松にお迎えし、科学研究費補助金基盤研究(B)「モンスーンアジアの小農経済：産業革命期日本の環境史的地域研究」の一環で8月26日金曜日に水文環境に関するワークショップを開催した。その次の日には、同様のテーマで、讃岐のため池と集落立地に関係する巡検を行った。その際、現在は東かがわ市に属している五名を訪問し、その後、高松市六条町に位置する高原水車場についても視察をした。後者については、また改めて報告をしたい。

基盤(B)は次のような研究課題を有している。「生態学的にも地質学的にも多様な地域において、いかに小農経済は生き延びることができたのか。あるいは逆に、今や風前の灯となっている小農経済、その衰退の根本原因は実は産業革命期における地域把握の決定的な転換にあるのではないかという仮説を、江戸・明治期そして大正期に残されている地誌の環境史的比較研究から検証する。経済史・環境史研究を基軸に、日本の近世近代文書研究、歴史地理学的な地理情報システム研究、そして気象学的解析からなる協働研究は、太陽光に基づく植物の光合成によるエネルギー創出を起点とする有機経済が地域の発展にいかに効果的であったか、あるいは何を起因にいかなる過程でそれが放棄されたのかを実証する。」

「小農」というのは経済史の専門用語である。小さな単位の農民経営を意味するが、それは大資本が投下されない経営でもある。世界中のどこでもそのような小農経済が支配的であるということはない。むしろ、大規模な植物工場的な農業経営が支配的な地域の方が多い。光合成によるエネルギー創出を基幹とする経済を有機経済と呼ぶとすれば、その経済社会は、現代の経済社会では想像できない多様な地理的環境や気象条件あるいは土壌のあり方に影響を受けている。あるいは逆にそのような全般的な自然条件を巧みに利用してきた経済社会であるとも言える。しかし、それは同時に常に自然の脅威や気候変動、異常気象などの自然災害を念頭におかざるをえない社会でもあった。

そこで、まずは現場を視察してみる必要がある。舗装道路、砂防ダム、水路その他の人工的構築物は地域社会を大きく変えている。しかしそれでも、過去の社会を知る手がかりはどこかで得られるはずであるし、また、それがどのような形で変化を遂げていくかを知る手がかりも得ることができるであろう。

ここでは写真を中心に五名の集落や田畑そして水文環境を見てみようと思う。写真は主にカメラマンとして同行した妻の倫子の撮影によるものである。次頁の右側の写真1は、五名小・中学

表1：五名のため池
（「池泉合符録」より）

No.	池名	総水掛高(石)
1	峠池	10.8
2	野田池	9.6
3	同所西池	0.8
4	吉池	1.1
5	同所下池	0.7
6	石ヶ小屋池	1.1
7	同東池	1.2
8	本儀池	1.3
9	同所下池	2.8
10	奥池	10.1
11	儀石池	3.0
12	谷池	10.2
13	下池	3.0
14	道池	3.5
15	同所下池	5.2
16	下池	4.7
17	旧ノ谷池	6.0
18	宗四郎池	3.0
19	大原池	2.0
20	裏池	3.3
21	中塚池	2.5
22	同所東池	2.0
23	雑蔵池	2.5
24	同所中池	3.2
25	同所上池	3.3
26	同所東池	0.7
27	国行池	1.2
28	筒橋池	4.0
29	藤加の池	3.0
30	的場池	2.0
31	同所上池	3.5
32	前池	1.2
33	同所上池	1.3
34	同所上池	2.2
35	同所上池	2.5
36	木屋谷池	2.1
37	同所北池	2.0
38	泉谷池	2.7
39	西池	5.1
40	向池	4.9
41	大坪池	4.3
42	紫折池	0.5
43	高座池	0.5
44	市郎右衛門池	3.0
45	東谷池	2.1
46	同所上池	1.3
47	同与ノ谷池	0.9
48	菅池	1.6
49	北ノ谷池	7.5
50	瀧之上池	4.5
51	同所上池	3.2
52	無能菅池	1.2
53	同所南池	1.2
54	口船池	39.0
55	とろろ池	3.0
56	同所南池	2.3
57	日塚池	3.0
58	裏池	7.5
59	同所下池	1.5
60	正月池	5.2
61	同所西池	3.1
62	角条池	6.1
63	同所西池	1.2
64	黒川池	4.2
65	同所奥池	4.0
66	弘川池	5.1
67	同所東池	5.0
68	預り小屋池	2.5
69	同所上池	2.0
70	とろろ池	0.6
71	同所北池	0.5
72	同所上池	0.5

校の廃校跡地に建てられた「五名コミュニティセンター（小学校跡地）」（写真の右奥）そして正面に見えるのが「五名ふるさとの家」である。後者は、2019年7月14日（<https://www.gom-you.com>）に産直カフェとしてリニューアルオープンしたとサイトでは書かれている。



写真1：五名ふるさとの家

左の表1は、江戸時代の歴史資料である「池泉合符録」から、五名村のため池に関する記載を抜き出したものである。72個のため池が記載されてお

り、さらにそれぞれの池ごとに水掛高が記載されている。水掛高というのは、そのため池から供給される農業用水でもって、どの程度の穀物等の生産ができるかを、米の量としての石高で算出したものである。石（こく）は尺貫法における体積（容積）の単位の一つであり、下位単位は10進法で10斗となり、100升そして今でもお酒で使う1,000合となる。五名村の場合は、斗の単位までの記載がある。

一般に理解されていることとして、伝統的な日本社会では1食に米1合で、1日の成人消費量を1日3合として、年間おおよそ1石とされている。あくまでも概算でしかないが、表1のNo.1の峠池の場合、水掛高が10.8石なので、およそ成人10人分の米穀生産が可能な量の水を供給できるため池となる。2～3世帯程度であろうか。ただ、この生産量は、基本的に租税対象額と考えた方が良く、実収生産高はさらに高いと考えていいように思う。

説明が後先になったが、「池泉合符録」では、香川県つまり讃岐の東半分の東讃の全体的ため池について、上記のような記載がなされている。作成年代は、その史料における年代記述から寛政9年(1797)から文政元年(1818)にかけての徴税のための調査結果であることがわかる。当時の郡単位・村単位で記載されている。『香川県史』10（資料編 近世史料II）（香川県編、四国新聞社、1987年、261-361頁）所収の史料である。非常に貴重な情報であり、今後の讃岐の水文環境研究に欠かせない。

さて、表1を見てわかるように、72個のため池について、全体的ため池の水掛高が記載されている。これはある意味では珍しい。平野部の大きなため池の場合は、複数の集落あるいは農村に水を供給している場合もあり、また、複数のため池がつながって、一つのまとまりと

なって平野部の水田に水を供給する場合もある。その場合には、一つ一つのため池ではなく、複数のため池について水掛高が合算して記載されている場合も多い。その意味で、この五名のため池は、谷間にある一つのため池がより低い土地へと水を供給している可能性が高い。今回の巡検でその様子も観察することができた。



写真2～4：滝之上池（現在名、滝之上峠池）

今回の巡検で「池泉合符録」の記載と同定できたため池は3個である。72個のため池は今では使われず草地になっている場合もあり、全てを同定するための道のりは長い。同定できたため池の一つが滝之上池であり、現在は、滝之上峠池と呼ばれているようである。写真ではうまく出ていないが、このため池の水路の上を道路が走っており、その細い舗装道路の反対側に水田が広がっており、今でも稲作が続けられている。「池泉合符録」では4.5石の水掛高を有していた。写真では家が遠くに見えるがこれが四反（0.4町）ほどの水田ということであろうか。一反あたりの収量は江戸時代と現代では大きな違いがあり、簡単には比較できない。



5



6



7



8

写真5～8：同所上池（現在名、上のおく池）

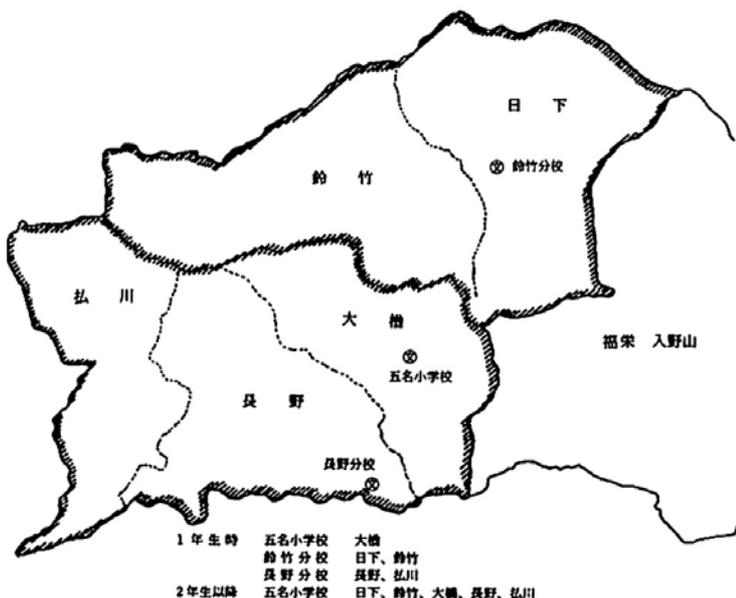
滝之上池から続く道路をもう少し先に進むとまずは水田そしてため池があった。これが「池泉合符録」で滝之上池の次に書かれていた「同所上池」と考えられる。水掛高は少し少なく3.5高であった。確かに水田面積も先の滝之上池から見える範囲よりも小さいように見える。この二つのため池は大櫓地区に属していることが、後にも触れる「五名屋号マップ」から確認できた。これはリニューアルされた「五名ふるさとの家」に以前は飾られていたものかもしれない。

さて、この五名村は、白鳥町に属していた時代があり（1955年7月に白鳥町発足、2003年4月東かがわ市発足まで）、1985年に公刊された『白鳥町史』の536頁に、五名小学校の通学区分図があり、五名の地区名が分かる。上記の二つのため池はこの地図の大櫓と長野との境界線の大櫓側にあったことが改めて確認できる。

また、その説明書きによると、一年生時は、五名小学校、鈴竹分校そして長野分校に分かれており、長野と弘川の住民の一年生は長野分校に通っていたようだ。

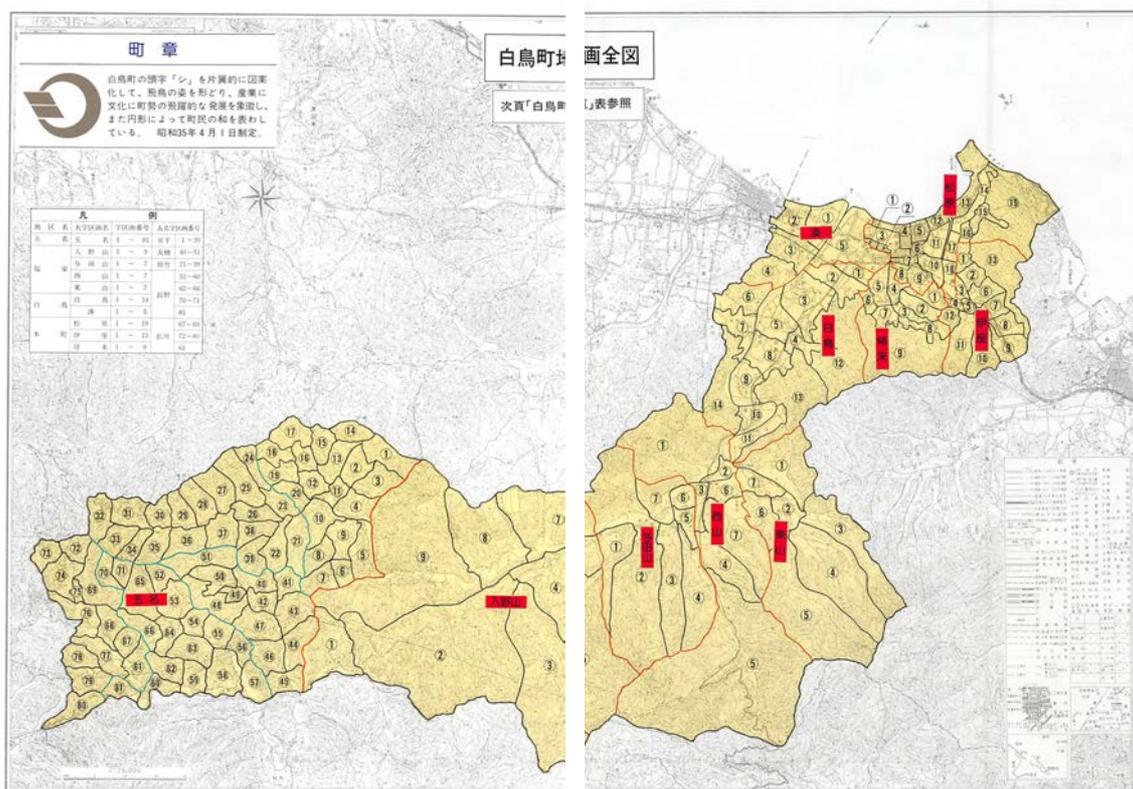
また、同町史に記載されている当時の白鳥町全体の地区区分（地図2参照）から、五名が非常に小さな集落単位で構成されていたこともわかる。五名は隣の入野山などと比べてもその違いは歴然としている。さらに標高図に河川図を書き込んだ地図3を見ると、五名の五つの地区である日下、鈴竹、大橋、長野そして弘川という集落の成り立ちには、その水系との関連を抜きにしては考えられないことも想像できる。

五名小学校通学区分図



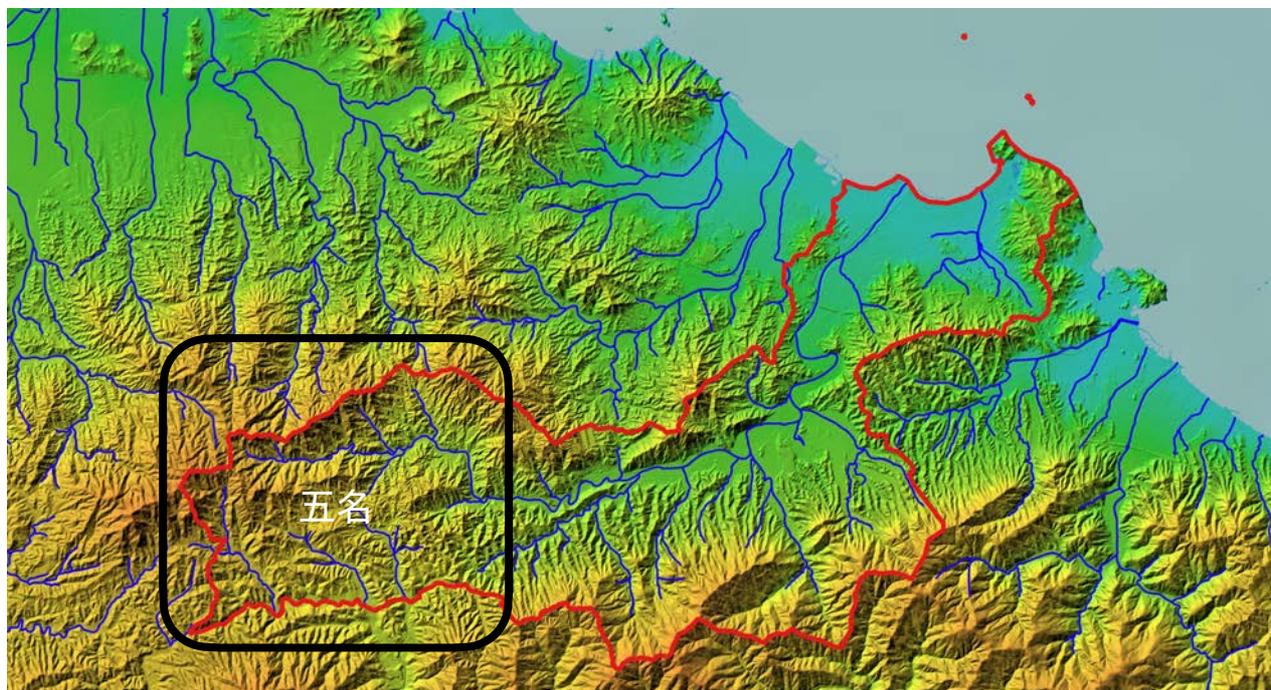
地図1：五名の地区区分（『白鳥町史』所収）

最後に今回の巡検で、現地での聞き取りなども含めて、「池泉合符録」には、翻刻の過程での間違いのあることも判明した。五名で最も大きなため池は、No.54の口船池であり、水掛高は39石であった。しかし「池泉合符録」では、この池名は「江船池」となっていた。江戸期の歴史資



地図2：白鳥町地域区画全図（『白鳥町史』所収）

料の翻刻をよく手がけている服部氏の指摘で、崩し文字でその読み違いはよくあるとのことであった。確かにそうである。現地で、手作りの「五名屋号マップ」を作成された年配の女性が五名のため池と言え「口船池」だねということからこの翻刻間違いが判明した。地名辞典などでも『香川県史』での間違いがそのまま使われていることがある。



地図3：旧白鳥町の標高図（村山知洋作図）

その口船池が今回の巡検での三つ目のため池同定となった。この池は、現在の国道377号線の東側に位置している。このため池も大櫛地区に属する。なお、「五名屋号マップ」では地区名が五つではなく、大櫛に東大櫛が加わって六つになっている。写真9は、その屋号マップに付された凡例のための掲示板である。六つの地区に分かれていることがわかる。

次頁の写真10/11に示した口船池は、現在は二つの池からなっている。「池泉合符録」には一つの池のみ登録されており、その形状は異なっていたのかもしれない。また、39石の水掛高ということであり、現在のアスファルトの二車線道路ももちろんない時代、どのような水田景観であったのか、何らかの形で復元できないかと考えている。

なお、次頁の写真14は、口船池の堤防が道となっており、そこに掲げられた看板には、「この市道はイノシシ等進入防止のため、開閉方式にしています。通行した際は、・・・（必ず閉めて）ください。ご協力をお願い申し上げます。平成30年3月18日 大櫛集落協定」とある。先に聞き取りをした女性によると若い頃は、この池の淵を通る峠道のみ、バスが走っていたという。



写真9：五名の地区名と屋号

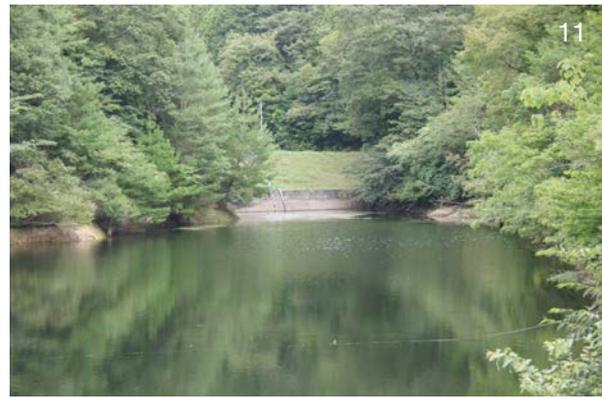


写真10～14：口船池とその棚田



空中写真1：1975年3月4日撮影（国土地理院）

1975年3月4日撮影の国土地理院の空中写真（空中写真1）では、口船池（左側）から五名ダム・ダム湖方面に向かっての峠道（中央付近）がくっきりと見える。この湊川・大曲に向かう峠道は、トンネルを含む尾根伝いの道で口船隧道と呼ばれるようである。

なお、五名ダムのダム湖は、五名と入野山の境界線となっており、こちらは湊川水系に属しており、大内ダムのある与田川水系と合わせて、与田川・湊川水系と呼ばれている。それは、地図「大川平野のため池」（讃岐のため池誌編さん委員会編『讃岐ため池誌』香川県農林水産部土地改良課発行、2000年、所収）において確認できる。五名は、鈴竹・日下地区がこの水系に属し、大橋・長野・払川地区は徳島側の一級水系吉野川に合流する一級河川、日開谷川水系に属していることもわかる。五名という村は、五つの地区（現在は六つ）そしてさらに小さな単位に区分されていただけでなく、水系上、大きく二つの地区に分かれていることもわかった。